

灯台へ向けられた「まなざし」に見る可能性

The Potential Seen in the Gaze Toward the Lighthouse

其力干 -QILIGAN-
(北海商科大学大学院)

池ノ上 真一 -Shinichi IKENOUE-
(北海商科大学 一般社団法人日本海洋文化総合研究所)

[キーワード] 観光のまなざし, 灯台観光, 海洋文化

Keywords: Tourist gaze, Lighthouse tourism, Maritime culture

灯台に向けられたまなざし

灯台は歴史的に「航路標識」としての機能を果たしてきたが、近年はその役割が多様化し、観光資源や文化的・教育的な価値を持つ存在へと変化している。

日本においては、明治期以降、「灯台の父」リチャード・ヘンリー・ブランドンの指導のもとで近代灯台の整備が進められた。他方で、羽成（1889）による「東海名勝詠港案内」や、東京鉄道局（1929）による房総半島の観光名所を案内した文献で犬吠埼灯台が紹介されるなど、当初から観光や文化的価値が評価されており、デスティネーション（観光地）としての灯台への価値評価があったことが分かる。

さらに、1980年代から1990年代にかけて、多くの灯台が文化財として保存されるようになり、文学や映画の題材としても取り上げられ、「孤独」「郷愁」「歴史の証人」といった感情を喚起する場所

となった。2000年代以降、灯台観光はさらに活発化し、「恋する灯台プロジェクト」（2016年～）のようにロマンティックな観光スポットとしてのプロモーションも展開されるようになった。加えて、灯台守体験ツアーやナイトツアーなど体験型観光が注目されるようになり、訪問者が灯台をより身近な存在として捉える機会が増えてきた。

また近年では、アニメ・映画の「聖地巡礼」の対象として灯台が注目されるほか、震災復興のシンボルやエコツーリズムの拠点としての役割も見られる。例えば、アニメ映画『天気の子』に登場した犬吠埼灯台はファンの訪問を促し、また屋久島の灯台は環境保全活動と結びついた観光資源としての位置づけを持つようになっている。こうした灯台へのまなざしの変化は、「機能的な施設」から「歴史的・文化的価値を持つ対象」へ、さらには「象徴的な存在」へと発展していることを示している。

か教養などでそれは定まっていく」とする（須賀，2020）。

しかし、安村ほか（2011）は上記の理論を「西欧中心主義的で感情分析が欠如」と批判している。例えば、千葉県・犬吠埼灯台の「日の出聖地」化について、日本人をはじめアジアにある「初日の出信仰」という文化的文脈抜きに説明できない。また、土井（2014）が指摘する「まなざしの感情的次元」は、灯台前でプロポーズするカップルの「永遠の愛」という願望投影に現れている。本稿では、灯台に向けられたまなざしを読み解く視点の重要性を提起したい。そこで以上の議論を踏まえ、次の枠組みを用いて灯台へのまなざしについて読み解いた。

1. 灯台と観光のまなざし

ジョン・アーリーの『観光のまなざし (The Tourist Gaze)』は、1990（平成2）年に提起されて以来、観光研究においては、様々な分野の様々な脈略や方法で援用・応用されており、観光研究の最も重要な文献の一つとして捉えられている。Urry and Larsen（2011）は、「観光」について「ふだんの日常生活と非日常の二項区分を基調にして発生する」とし、それをながめる「まなざし」は、「社会的に構成され制度化されて」いて「観念，能力，願望，期待などの特定のフィルターを通してであって、しかも社会階層とか性差とか国民性とか年齢と

2. 観光のまなざしの種類

Urry（1990）は、観光客からのまなざしの特徴として、次の6つを挙げている。①「無比なもの」（エッフェル塔、エンパイアーステートビル、バッキンガム広場、グランドキャニオン、ケネディ大統領が暗殺された場所など、誰もが知っているという前提があるがゆえに、一生に一度でもいいから見てみたいという欲求が働き、聖地化される）、②「特殊な記号」（典型的な英国の村、典型的なアメリカの摩天楼、典型的なドイツのピヤガーデン、典型的なフランスのシャトーなど、対象を記号のシニファンとして見るという形）、③「見慣れた

そこで、日本における観光のまなざしが顕著な犬吠埼灯台を対象に、まなざしの変遷について見ていく。主に、まなざしを確認したのは、旅行ガイドブック『るるぶ千葉房総』（1991～2023年発行のもの）をもとに、犬吠埼灯台についての紹介内容について分析した。その変遷を見てみると、1990年代には「太平洋の荒波が打ち寄せる灯台」（『るるぶ千葉房総』1994）として、犬吠埼そのものの自然名勝としての評価が強く、「白亜の灯台は犬吠埼のシンボル」（『るるぶ千葉房総』1998）として紹介されていた。また、灯台については、歴史的価値について言及されていた。2000年代以降は、「銚子の海を見守る白亜の灯台」（『るるぶ千葉房総』2000）として、より歴史的・文化的な視点からの紹介が増えている。また、2010年代以降には「関東最東端の日の出が見られる場所」としての聖地的な価値が強調されるようになった。そして、銚子電鉄や自家用車でのシーサイドドライブなど、移動手段と組み合わせた体験方法の紹介が見られる。さらに、SNS

本稿では、灯台への観光のまなざしについて、とくに犬吠埼灯台に着目し、その変遷を追いかけた。そこで分かったことは、①観光をととした地域との接続、②観光スタイルの変化に伴う灯台の価値の再解釈、であった。冒頭に述べたとおり、灯台そのものは、航路標識という「機能的な施設」として建設されたが、観光という現象を通じて、「歴史的・文化的価値を持つ対象」へ、さらには地域にとって「象徴的な存在」に再解釈されることで、新たな価値が創造されてきた。

灯台観光の発展は、地域振興と環境保全の観点からも新たな可能性を持つ。実際に、日本財団の「海と灯台プロジェクト」をはじめ、灯台を活用した地域イベントの開催や、地元の特産品と連携した観光プログラムの開発、宿泊施設やアートスペースとしての整備が全国で始まっている。

近年、日本各地では人口減少が深刻化しており、地

物の見慣れていない面を見る」という事例（博物館での展示物）、④「普通でない文脈で展開される普通の社会生活を見る」事例（かつての中国観光）、⑤「通常でない視覚環境のなかで、見慣れた仕事や行動をする」という事例（異なる視覚的背景において行われるスポーツ、ショッピング、飲食など）、⑥「特別な記号」を見るという行為（月の石や有名な画家の絵画など、記号として特別な意味を与えられることによって初めてまなざしが向けられる）（土井，2014）。以上を踏まえ、本稿では、灯台へのまなざしの変遷をこの6つの特徴から分析し、可能性について考察した。

の普及とともに「インスタ映え」する景観としての灯台の価値が高まり、特に夜間のライトアップや絶景ポイントの写真が観光誘致に活用されるようになった。

このように、限られた期間ではあるが、犬吠埼灯台へのまなざしは、時代とともに変化したことが分かる。当初の房総半島や犬吠埼の自然名勝としての評価は、②「特殊な記号」としてのまなざしであると捉えられる。次に、灯台や地域のストーリーへの移行は、全国にある灯台ではあるが、より深い情報へアクセスしたいというニーズの表れといえ、③「見慣れた物の見慣れていない面を見る」への移行である。近年の観光客自らが聖地を巡る体験を重視する傾向は、⑤「通常でない視覚環境のなかで、見慣れた仕事や行動をする」である。以上のとおり、灯台は時代背景の変遷と共に、異なる視点によって再解釈されてきた。こうした変遷は、観光客のまなざしが単なる視覚的対象の享受にとどまらず、灯台の歴史的背景や地域との関係性を重視する方向へと変化していることを示唆している。

域の持続可能性が言及される中で、観光への期待が地域側から高まってきている。しかし、沿岸地域の多くは、かつての海上交通の要衝や漁場との関係で栄えたところも少なくなく、現在ではそれらの衰退とともに、僻地であると同時に観光地でもありながら、条件不利地域として扱われている。

そこで、今後の灯台観光の方向性としては、単なる「見る」対象から、「体験し、学ぶ」対象へとシフトすることが重要となってくるだろう。灯台へのまなざしが、体験型観光をととし地域のストーリーと接続することで、地域へのまなざしと相乗効果を生み出すことが期待できる。地域の歴史や文化と結びつけたストーリーテリングを強化し、観光客が灯台を通じて地域のアイデンティティを理解できるような工夫をすることで、地域への経済波及効果の最大化や、関係人口の創出に一役買えるだろう。

引用文献

- 土井文博（2014）観光社会学の可能性—J.アーリーの「まなざし」論を超えて—。海外事情研究，41(2)，11-40。
- JTBパブリッシング旅行ガイドブック編集部 編（1994）太平洋の荒波が打ち寄せる灯台で有名な観光最東端の地。『るるぶ千葉房総』JTBパブリッシング，96p。
- JTBパブリッシング旅行ガイドブック編集部 編（1998）関東最東端の岬に灯台が立つ豪快で雄大な海の景色を堪能。『るるぶ千葉房総』JTBパブリッシング，75p。
- JTBパブリッシング旅行ガイドブック編集部 編（2000）銚子の海を見守る白亜の灯台。『るるぶ千葉房総』JTBパブリッシング，96p。
- JTBパブリッシング旅行ガイドブック編集部 編（2009）銚子電鉄・途中下車の旅。『るるぶ千葉房総』JTBパブリッシング，77p。

- 須賀忠芳（2020）「観光歴史教育」の視座とその実践に関する考察—「観光のまなざし」からとらえる「歴史実践」の射程—。社会科研究，93，1-12p。
- Urry, J. (1990) The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies. Sage Publication.
- 加太宏邦訳（1995）「観光のまなざし 現代社会におけるレジャーと旅行」。法政大学出版局，328p。
- Urry, J. and Larsen, J. (2011) Tourist Gaze 3.0. Sage Publications. 加太宏邦訳（2014）「観光のまなざし増補改訂版」。法政大学出版局，446p。
- 安村克己・堀野正人・遠藤英樹・寺岡伸悟編著（2011）「よくわかる観光社会学」。ミネルヴァ書房，224p。